

# 序 文

第31回日本エンドメトリオーシス学会会長 小 西 郁 生  
京都大学大学院医学研究科 婦人科学産科学教授

第31回日本エンドメトリオーシス学会を、平成22年1月16～17日、京都東急ホテルにて開催し、無事に終了することができました。これもひとえに皆様方のご支援の賜物とここに厚く御礼申し上げます。

第1日目のワークショップとイブニングセミナーでは、子宮内膜症の癌化を大きく取り上げました。癌化の疫学、自然史、分子機序、病理学、画像診断に関して、この数年間における大きな進歩をレビューでき、実りあるプログラムとなりました。卵巣内膜症性嚢胞からの癌化は嚢胞内への出血の帰結として“鉄”がもたらす酸化ストレスが誘因である可能性が示されました。臨床的には嚴重な経過観察により大部分は比較的初期で発見されますが、稀には de novo 発癌のような形すなわち半年後にはすでに腹腔内に進展しているような例もあることが判明し、これは私たちにとって大きな脅威であります。また術前の MRI 画像診断により境界悪性腫瘍がかなり診断できることが示されました。さらに、明細胞腺癌であっても Ia 期であれば妊孕性温存ができる可能性も示していただきました。

第2日目のワークショップでは、尿路・腸管・胸腔など特殊な部位に発生する子宮内膜症を取り上げましたが、組織発生を含めた総合的なレビュー、各臓器に特異的な内科的、外科的治療の試みなど素晴らしい内容の発表をいただきました。このような患者さんに遭遇した場合の対処を考えるうえで参考になったものと思います。

一般口演では、エンドメトリオーシスの発生・進展機序に関する基礎研究、新たな薬物療法の効果、特異な経過をとった症例等、きわめて多数の演題をいただきました。活発なご討議があり、新たな知見が得られたものと思います。

第2日目のランチョンセミナーでは、子宮内膜症がもたらす2つの大きな症候、疼痛と不妊について、それぞれに対する個別化された対処法を update していただきました。また、シンポジウムでは、子宮内膜症の腹腔鏡手術—合併症を防ぐ—というテーマで行い、他臓器損傷のリスクを最低限にするための腹腔鏡手術の標準化に向けて活発な討議をいただきました。会場には、腹腔鏡手術をさらにレベルアップしようという情熱があふれていたように思います。

今回、本当に多数の先生方にお集まりいただき、誠にありがとうございました。この紙面をお借りして、改めて御礼申し上げます。先生方の今後のますますのご発展、エンドメトリオーシス研究の進歩を祈念いたしております。